日本語教育通信

http://www.jpf.go.jp/j/japan_j/publish/tsushin/

編集・発行　国際交流基金　日本語グループ

第57号

2007年1月発行　ISSN 1343-2524

JAPANFOUNDATION

CONTENTS
NIHONGO-KYŌIKU TSŪSHIN No. 57/JAN 2007

■ 表紙・特集 …… 1
海外日本語教師の再教育から学んだこと ～「国際交流基金 日本語教授法シリーズの発刊」に寄せて～
日本語国際センター　専任講師　久保田　美子

■ 日本語の教え方イロハ　第3回 …… 4
会 話

■ 授業のヒント …… 6
教室で写真を使う

■ 新聞・雑誌から見る現代日本　第25回 …… 8
STOP飲酒運転　代行業者　大忙し

■ 本ばこ（新刊教材・図書紹介） ……11

■ 文法を楽しく!!　第7回……14
「～て～」（2）

■ KC（関西国際センター）研修生の Nipponリポート　第7回 ……16
日本の高校に行きました

※ 本誌で、ルビが文字の下に付いているのは、紙や物差しなどでルビを隠して、漢字の読みの練習ができるようにするためです。

On the Web

http://www.jpf.go.jp/j/japan_j/publish/tsushin/index.html

以下の記事はJFのウェブサイトのみにてご覧になれます。

■ 日本語・日本語教育を研究する　第31回
日本語特殊拍の習得に関する研究
早稲田大学大学院日本語教育研究科教授　戸田　貴子

■ 授業に役立つホームページ　第16回
Web2.0と日本語教育（1）—ブログの活用—

■ 海外日本語教育レポート 第14回
カナダ・アルバータ州の初等・中等教育における日本語教育カリキュラム
カナダ・アルバータ州教育省日本語アドバイザー（国際交流基金派遣専門家）　室屋　春光

■ にほんごハローワーク　第7回
尺八を通して異文化を融合させる
ブルース・ヒューバナーさん
琴古流尺八・フルート奏者（出身：アメリカ合衆国）

『日本語教育通信』　第57号
2007年1月発行

編集・発行　国際交流基金　日本語グループ
〒107-6021　東京都港区赤坂　1－12－32　アーク森ビル　21F
TEL. 81-3-5562-3525　FAX. 81-3-5562-3498
E-Mail.　jfnckt@jpf.go.jp
編集協力
株式会社アーバン・コネクションズ

海外日本語教師の再教育から学んだこと

～「国際交流基金 日本語教授法シリーズの発刊」に寄せて～

日本語国際センター　専任講師　久保田美子

国際交流基金では、2006年度より「国際交流基金 日本語教授法シリーズ」の発刊を始めました。このシリーズは、国際交流基金日本語国際センターで1989年の開設以来行われてきた海外日本語教師のためのさまざまな研修を通して、そこで得られた考え方や経験をもとにつくられたものです。この記事では、このシリーズ発刊の意味と、このシリーズに込められている教師の再教育に対する考え方をお伝えいたします。

1.「国際交流基金 日本語教授法シリーズ」発刊の意味

現在世界の日本語学習者数は、日本国内で約13万人[注1]、海外では250万人を超えています。そして、海外の日本語教師の数は約3万3千人で、そのうち約7割が日本語を母語としない日本語教師です[注2]。つまり、日本語学習者の大半は海外の学習者であり、また、その教育の大半は、日本語を母語としない日本語教師によって支えられていると言えます。

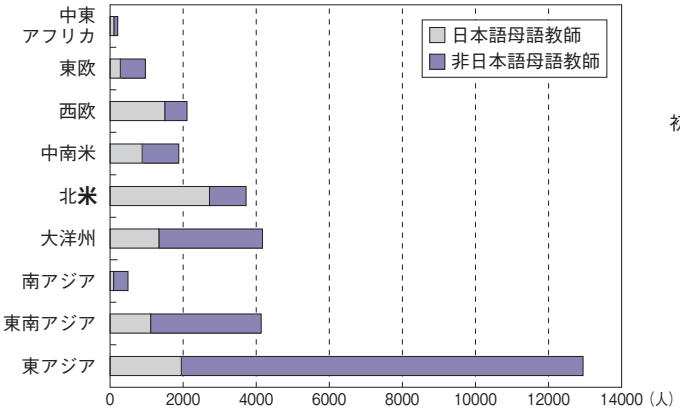
しかし、現在出版されている日本語教師の研修のための教材を考えたとき、そのほとんどが、日本国内で日本人によって利用されることが前提になっていることは否めません。そしてさらに、これから日本語教師を目指す人たちのための知識提供型のものが多いということも事実です。我々は、重要でありながら、焦点のあてられてこなかった「海外で日本語を教える教師」、さらに「日本語を母語としない教師」を視野に入れた教授法教材を作成しました。さらに教師研修での経験を生かして、知識を提供するだけでなく、「日本語教師に必要な基本的な姿勢や力を身につける」ことも目指した教材になっています。以下にこれらの点について説明します。

①　海外で日本語を教える教師のための教授法教材

日本国内で日本語を教える場合と、海外で日本語を教える場合は、何が異なるでしょうか。一番大きな違いは、学習者にとって日本語が、住んでいる国で実際に使われていることばか、住んでいる国では使われていない「外国語」であるかという違いです。この違いは、学習者の意識や、実際に日本語に触れる機会の質や量に影響し、また、教師が利用できる教材や素材の質や量にも影響

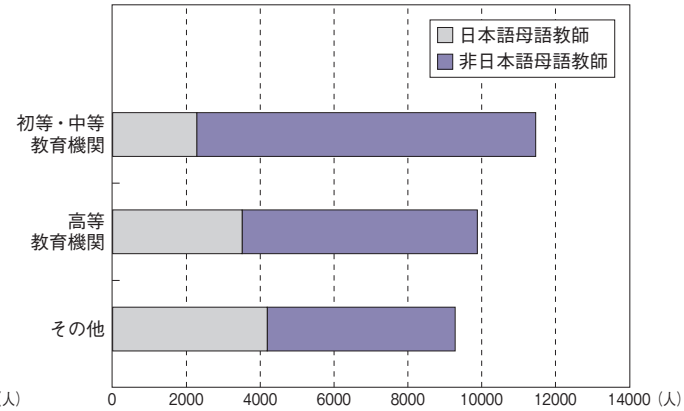
■ 地域別日本語教師数

（海外日本語教育機関調査・2003年調査結果に基づく）



■ 機関別日本語教師数

（海外日本語教育機関調査・2003年調査結果に基づく）



します。教授法教材を考える上で、こうした面も充分考慮する必要があります。この教授法教材シリーズは、こうした「外国語」として日本語を教える場合も想定してつくられています。

② 日本語を母語としない教師のための教授法教材

日本語を母語とする日本語教師が「日本語」を分析するとき、自分はどのようにことばを使っているか考える「内省」という方法をとることができます。日本語を母語としない日本語教師の場合には、そうした方法をとることは難しいですが、自らが学んだ経験を持つ、あるいは、いつでも学習者の立場になれるということが、教え方を考える上で大きな利点となっています。そうした点を踏まえ、日本語を母語としない教師にとって、一つの課題をどのような課程で考え、解決していけば有効なのかも考えました。例えば、実際に学習者に与える課題を、まず自ら体験してもらうことによって、学習者としての「発見」や「達成感」などを思い出してもらい、それを自分の教え方に応用してもらったりします。また、この教授法教材シリーズでは、できるだけわかりやすい日本語の文章で説明することを心がけ、漢字の負担も少なくなるように配慮しています。

③ 教師として必要な基本的な姿勢や力を身につけるための教材

前述の通り、国際交流基金日本語国際センターでは、開設以来約17年にわたって海外の日本語教師研修を行ってきました。この間、当センターで研修を受けた研修生は、延べ数で6500人を超え、その出身地域は、90か国以上になります。研修は約2か月の短期研修、約6か月の長期研修、さまざまな国の教師が集まった研修、一つの国の教師を集めた研修など、さまざまな種類があります。内容としては、「日本語」「日本語教授法」「日本事情」の三つの分野の中から、それぞれの分野で、できるだけ新しく、普遍的で、なおかつ共通に認識できるものを取り上げています。

そして、17年間の経験を通して我々が学んできたことは、単にそうした分野の知識や情報を提供するだけでは、それを帰国後に実際に生かしてもらおうと考えた場合、不十分な場合もあるということでした。そこで日本語国際センターの研修では、新しい知識や情報を応用していく上での基本的な姿勢や能力をも養うことを目標とするようになりました。具体的には次のような姿勢や能力です。

自分で考える力

新しい理論や知識に接したとき、受身的にならず、自分で考え、理解し、納得してから吸収することが必要であると考えます。

客観性、柔軟性

現職の教師は、時として、自分のこれまでの考え方や教え方にとらわれてしまっていることがあります。新しい考え方や、他の教師の意見に耳を傾け、その内容を客観的に理解し、時には柔軟に受け入れる姿勢や能力もまた必要であると考えます。

現実を見つめる視点

新しい理論や知識を、自分でよく考え、柔軟に取り入れることができるようになったとしても、それをすぐに自分の教育現場で生かせるとは限りません。自分自身の環境や、自分の特性や能力など、現実を正確に把握した上で、利用したい理論や知識をどうすれば生かすことができるのか、現場に合った適切な方法を見つける姿勢や能力も必要だと考えます。

研修後も自分の力で成長し続けることのできる力

海外の日本語教師の場合、現場に戻ると、日本語教師が自分一人である場合も珍しくありません。研修中のように、すぐに相談できる講師やクラスメートがいるわけでもなく、孤軍奮闘しなければならない現実が待っています。たとえ一人になっても、常に新しい情報を取り入れ、学び続け、自分自身で課題を見つけ、成長し続ける姿勢を身に付けることが必要です。

教師にとって必要なこれらの基本的な姿勢や能力に対する考え方は、1990年代以降、日本語教育の分野でも盛

んに言われるようになった「教師トレーニング」から「教師の成長」への考え方の変化、その中で出てきた「自己研修型教師」「内省的実践家」と呼ばれる教師モデルの理論にも裏打ちされ、日本語国際センターにおける教師研修の根底を支える考え方となりました[注3]。

研修では、このような基本的な姿勢や力を身に付けさせるために、新しい理論や知識を提示するだけでなく、クラス内でのディスカッション、グループ活動、模擬授業などを通して、自らのそれまでの教え方をふり返り、他の研修生の意見を聞き、さらに実際に体験するなどして、新しい考え方、教え方の背景にある意味やその効果について考えられるようにしています。また、学校の方針、現在とられている教授スタイルや学習スタイル、学習者のニーズなどをもう一度見直し、思い込みはないか充分に再検討し、その上で、新しい考え方を現場に適用することが可能か、可能にするために自分がしなければならないことは何かを考えます。さらに、必要な情報の取り方、ネットワークや教師同士の学びの場を形成することの必要性などについても考え、研修後も学び続ける上で必要なことを考えます。

こうした研修における実際の取り組みをこの教授法教材シリーズの中でもできるだけ再現するよう工夫しました。そうした工夫を理解していただくため、次にこの教授法シリーズの構成について説明します。

2.「国際交流基金 日本語教授法シリーズ」の構成

この教授法教材シリーズの中にはさまざまなコーナーがあります。その順番やアプローチの仕方はテーマによって異なりますが、いくつか代表的なコーナーについて説明します。

① 振り返りましょう

このコーナーでは、自分自身が実際に行っている言語活動や、自分自身が現在行っている教え方をふり返り、客観的にみつめなおすことができるような課題が提示されています。

② 考えましょう

振り返った内容に関連する新しい理論や考え方が提示され、その考え方がどのような意味をもつのか自分で考えるための課題が提示されています。

③ やってみましょう

このコーナーでは、実際に体験して考えてもらいます。内容によって、最初にまず体験し、「気づく」ためのコーナーと、それまでのコーナーで提示され検討してきた新しい理論や考え方を実際に使って、新たな課題に取り組み、本当の意味でその考え方を理解しているのか、また自分にとってどのような利用が可能なのかを確認するコーナーもあります。

④ 整理しましょう

新しい知識の意味や、自分の現場での利用方法について整理することができます。

こうしてこの本を通して、新しい知識や情報を得るだけでなく、同時にそれを理解し、応用していく上での基本的な姿勢や能力をも身につけていくことを目指しています。

3. 国内、海外を問わず世界中の日本語教師が同じ教材で学ぶことの意味

前述のような基本的な姿勢、能力は、海外の日本語教師再教育の中から生まれた考え方ですが、これは、日本国内でもやはり必要とされている能力です。日本国内における日本語教育も、以前のような留学生や留学準備のための教育だけではなく、日本在住の外国人やその子弟のための教育など、さまざまな広がりを見せてきました。そして、それは全て個別のケースである場合が多く、日本国内にいても、海外で孤軍奮闘する教師のように、一人で考え、工夫していかなければならない場面も多いことでしょう。また、日本語教師の行き来も盛んになり、国内、国外の両方で日本語を教えた経験をもつ人も増えてきました。今、我々が海外の日本語教師のために行ってきた研修の内容、そしてその中で得られたさまざまな知見を、日本国内も含めた世界の日本語教師のために還元することができたらと考えています。

以上、この教授法シリーズ発刊の意味やその特徴について、国際交流基金日本語国際センターの海外日本語教師研修における考え方とともに紹介いたしました。日本語の教え方はさまざまです。教師の数だけ教え方があるというよりは、学習者の数だけ教え方があると言うべき時代になりました。教師は一つの固定した得意な教え方を身につけることではなく、学習者に合わせた教え方を工夫することが求められます。そうした教師の成長を支援するために、これからも研修や教材作成に努力していきたいと考えています。

注1）文化庁（2005）「平成16年度国内の日本語教育の概要・外国人に対する日本語教育の現状について」（文化庁ホームページ　http://www.bunka.go.jp/）によれば、平成16年11月1日現在の調査結果から、国内学習者数は、12万8500人と発表されている。

注2）国際交流基金（2005）『海外の日本語教育の現状－日本語教育機関調査・2003年』によれば、2003年調査結果から、海外における日本語学習者数は、235万6745人と報告されている。

注3）参考：岡崎敏雄・岡崎眸（1997）『日本語教育の実習 理論と実践』

第３回

日本語の教え方

会話

日本語国際センター専任講師　長坂水晶

海外で活躍している日本語教師のみなさんから、よく「日本語教授法を知りたい」「すぐに使える授業活動を提供してもらいたい」という要望をいただきます。「日本語の教え方　イロハ」のコーナーでは、日本語国際センターの専任講師が、日本語の教え方を学んだことのない方に、「コースデザイン」や「読解」「会話」「聴解」「評価」などの基本的な教授理論、教授知識をわかりやすく解説します。既に日本語を教えている方も日本語教授法に関する基礎固め、知識の再点検にお役立てください。

学習者の話す力を伸ばすには、どのようなことに気をつけて授業をしたらよいのでしょうか。「話す」とはどういうことなのかを整理した後で、具体的な「会話」授業方法を考えます。

1.「話す」とは

日常生活において、私たちは次のような流れで話をしています。

①言いたい内容を考える ⇒ ②どのように言うか考える ⇒ ③実際に言う

外国語で話せるということは、外国語で①⇒②⇒③を自力でできるということです。そのためには学習者自身が言いたい内容や表現を考えるような練習を行う必要があります。

例えば「あなたの部屋には何がありますか」という質問に答える課題では、①⇒②⇒③の流れで学習者自身が話をすることになります。しかし「黒板の前に机があります」など、教室にあるものを使って教師が言い、それを学習者がくりかえすような練習では、学習者は①⇒②⇒③を自力で行っていません。

2. 会話～話し手と聞き手のコミュニケーション～に必要な条件

会話は、話し手と聞き手のコミュニケーションです。このコミュニケーションには四つの特徴があります。

1）**目的**：話を始めるときには目的があります（例：相手を誘いたい、情報が得たいなど）。

2）**情報差**：相手が知っていることと自分が知っていることの間の情報差を埋めるために話をします。

3）**選択権**：話し手は言いたい内容も表現も自分で考えて話します。

4）**反応**：話し手は、聞き手の反応（内容を理解しているか、どのような気持ちで聞いているかなど）を確認しながら話します。相手に合わせて自分の対応も変化させていきます。

授業でも、このような会話の四つの特徴を持つ練習を取り入れる必要があります。自分が行っている「会話」の授業をチェックしてみましょう。

会話授業のチェック項目

①	教師より学習者の方が多く話していますか。	
②	学習者が自分で話したい内容を、自分で考えて話していますか。	
③	言いたいことをどのように言うかを、学習者が考えて話していますか。	
④	学習者は会話練習をすることで、お互いの情報差を埋めていますか。	
⑤	相手の反応を見ながら、自分の対応を考える会話練習となっていますか。	
⑥	練習する会話文が、目的がある会話となっていますか。	

3. コミュニケーションに必要な能力

私たちが会話によるコミュニケーションをするためには、文法規則、語彙の知識、正確な発音など「文法能力」だけでなく、次のような能力が必要になります。

1）**社会言語能力**：相手との関係や場面に応じて、いろいろなルールを守って言語を使用する能力。相手や場面により表現や話題を選ぶことが必要です。また、おじぎや話すときの相手との距離など、適切な非言語行動をとることも、この能力に関わるものです。

2）談話能力：会話を始めたり、続けたり、終わらせたり、話題を転換したりする、まとまった会話の流れを作る能力のこと。あいづちをうつのも、この能力に関わるものです。

3）ストラテジー能力：コミュニケーションがうまくいかなくなったときに、自分の発話を調整したり（説明を加える、母語を使用するなど）、相手に助けを求めたり（聞き返す、自分の理解が正しいか確認するなど）して、コミュニケーションを続ける能力です。

会話の授業をするときにはこれらのコミュニケーション能力を伸ばすような計画を立てることが大切です。

4. 会話の授業を計画する

1から3で見たような特徴を取り入れた授業をするにはどうしたらよいでしょうか。ここではロールプレイを取り上げます。ロールプレイは海外の教育現場でも、話す機会を作るための活動として準備がしやすいものです。「友達を誘う・誘いを断る」というロールプレイを例に考えます。

＜授業の準備＞

- **ロールプレイの場面や目的を決める**
  教科書のモデル会話の場面や、学習者にとって必要な機能などから場面や目的を決める（例：友達を誘う、断る）。役割（友達同士）や状況（友達を映画に誘う／誘いを断る）などを書いたロールカードを用意する。市販の教材を利用・加工してもよい。話す**目的**や**情報差**を作る。表現の**選択権**を学習者にどの程度与えるか決める。
- **焦点を当てるコミュニケーション能力を整理しておく**
  授業で取り上げたい能力を整理しておく。**談話能力**に関わる表現（例：会話を始める／断る／わびを言って会話を終える）や、**社会言語能力**に関わるもの（例：相手や状況に合わせて誘い方や断り方を調整する）はロールプレイで取り上げやすい。

＜活動の前＞

- **動機付けや背景知識の活性化**
  話したいという気持ちにさせ、自分が知っていることを思い出させることで、話す活動がスムーズにできるようになる（例：友達と週末にどこへ行くことがあるか、楽しかった思い出は、など）。

＜活動の実施＞

ロールカードを配りロールプレイをさせる。ペア同士で行ったり、全体の前で何組かが発表したりして、お互いに観察もする。

＜活動の後＞

- **気付いたことを話し合う**
  難しかったところや間違えたところについて話し合い、必要な表現を確認する。
- **評価する**
  目的が達成できたか（例：友達を誘えたか／上手に断れたか）、相手にどんな印象を与えたか、適切な表現が使えたかなど、教師や学習者同士や自分自身で評価する。必要なら新たに語彙や表現の確認や導入をする。

初級レベルでは、ロールプレイに必要な表現やモデル会話を活動の前に提示したり暗記させたりすることがありますが、1で見た①言いたい内容を考える、②どのように言うか考えるの段階を学習者が自力で行うことにはなりません。ですから初級後半以降は、まずは学習者が持っている力で一度ロールプレイを行ってみると、その会話で必要な表現や力を学習者自身で気付くことができます。

ロールプレイの他にもさまざまな活動があります。取り上げやすいコミュニケーション能力と共に活動例を以下に挙げます。

■ インタビュー

談話能力……インタビューの開始、終了、次の質問への移行、相手の話への理解や感想を示す

社会言語能力……相手や場面に合わせて、話題や話し方を調整する

ストラテジー能力……相手に詳しく説明してもらったり、自分が理解できるような話し方に変えさせたり、自分の理解を確認したりする

■ ディスカッション

談話能力……発言の順番を取ったり渡したり、ディスカッションの流れを作ったりする

社会言語能力……効果的に自分の意見を伝えて相手を説得したり、相手に配慮して反対意見を言ったりする

ストラテジー能力……インタビューと同じ

■ スピーチ

談話能力……一定のまとまりをもった発話を開始、展開、終了させる

ストラテジー能力……言葉が思い浮かばない時などに、適当なフィラー表現を使って時間をかせいだり、間を置いたりする

5. 会話の授業で大切なこと

活動を選ぶ時に、伸ばしたい力や学習者のニーズを考慮する必要があります。また、話したいという気持ちや話す必要性を高めるためには、学習者が興味を持てるテーマにすることが大切です。教室の外に出かけたり、人を招いたりして活動をすると、楽しいだけでなく相手との関係に合わせて話題や表現を選ぶ社会言語能力を磨いたり、現実のコミュニケーションに必要なストラテジー能力を伸ばしたりすることになります。

そして何よりも、学習者が楽しめる雰囲気の授業をすることが、「会話」の力を伸ばすためには重要でしょう。

参考文献

岡崎眸・岡崎敏雄（2001）『日本語教育における学習の分析とデザイン』凡人社

川口義一・横溝紳一郎（2005）『成長する教師のための日本語教育ガイドブック上』ひつじ書房

谷口すみ子（2001）「日本語能力とは何か」『日本語教育学を学ぶ人のために』世界思想社

☆☆ 授業のヒント

デジタルカメラやインターネットの普及により、写真を授業に取り入れる可能性が広がってきました。今回は、写真の使い方について考えます。

テーマ 教室で写真を使う

目的
写真の特徴をよく考えて、効果的な授業を行う。
学習者のタイプ
初級～中級（上級）
クラスの人数
何人でも

みなさんは授業で写真を使ったことがありますか。自分で撮った写真や絵葉書、雑誌の写真などを、教室で教材や教具として使ったことがある人も多いでしょう。小さな写真は、大人数の教室では全員に見せにくいという問題がありますが、最近はコンピューターやデジタルカメラを使って、教室でさまざまな写真を、いろいろな形で見せることができるようになってきました。

◆写真の特徴

写真には、次のような特徴があります。

- 言葉では簡単に説明できないことを伝えられる
- 現実感がある
- 学習意欲を高める

例えば、日本の「和室」を見たことのない学習者に「和室」を説明したいときに、言葉で説明をしてもなかなかイメージがつかめません。写真を見れば、どんなものかすぐにわかります。また、ロールプレイの場面を設定するときに写真を使えば、場面を具体的に示せるし、現実感を持って活動ができるでしょう。写真は、学習者の注目を引きやすく、興味を持たせたり、わかりやすくしたりすることもできます。

◆日本語教育用『写真パネルバンク』の写真を使う

『写真パネルバンク』は、日本で日常的に目にする物や場所、日本人が日常的に行う動作や活動を示す写真が全部で643枚もある教材です。日本の生活習慣や文化事情も学べるようになっています。写真は、学習者が数十人いる教室でも十分に見せられる大きさに作られていますが、CD-ROMのものもあるので、コンピューターを使って見せることもできます（コンピューターのモニターで見せたり、プロジェクターにつないでスクリーンに映し出したりできます）。また、「みんなの教材サイト」（http://momiji.jpf.go.jp/kyozai/）には、『写真パネルバンク』の写真の約8割が、電子ファイルとして無料で提供されているので、コンピューターを使って見せたり、印刷してパネルと同じように使ったり、好きなように加工したりすることができます。

『写真パネルバンク』は、語彙の指導や日本事情の紹介、文化理解にたいへん便利な写真教材です。また、何人かの人の日常生活の写真が数枚ずつあるので、次のような活動にも使えます。

＜活動例＞

目標：一日の生活について描写する。（または「～時にVます」の文を作る。）

活動：同じ人物の写真を何枚か見せて、その人の一日の生活を話したり、書いたりする。

この活動のように、写真を使う目的が文型の練習など言葉の学習であっても、写真の中の文化的要素に注目させたり、文化的な気づきを促したりすることは写真の教材ならではのことなので、是非取り入れてみたい視点です。

◆先生や学習者の撮った写真を使う

身近な人が撮ったり写っていたりする写真は、自然と興味がわき、積極的に話そうという気持ちになります。

＜活動例＞

目標：自分の家族や体験について話す（レベルに合わせた文型や表現を使う）。

活動：学習者をペアまたはグループにして、各自が持ってきた自分の家族の写真（または旅行の写真など）を、他の学習者に見せながら説明する。他の学習者が質問をして答えるようにしてもよい。

学習者同士でこの活動をする前には、教師の写真で活動の例を示すといいでしょう。デジタルカメラで撮った写真であれば、デジタルカメラをテレビモニターにケーブルでつなぐことによって、全員に同時に見せることができます。

◆教材用に写真を撮る

もし、日本に行って写真を撮るチャンスがあれば、是非、授業で使える写真を撮ってみてください。例えば、次のような写真なら授業ですぐに使えます。

①教科書に出ている場所や場面、トピックに関係のある写真。

②文字の学習用に、看板や標識の写真。

③教師自身が驚いたものや珍しいと思ったものの写真（日本について紹介したり、異文化について考えさせたりするときに使う）。

◆写真をインターネットで探す

授業で使いたい写真が、市販の教材にあるとは限りません。また、教師が撮影するにも限界があります。そんな時にインターネットを使えば、学習者に見せたい写真を探すことができます。例えば、Googleの「イメージ検索」（http://images.google.co.jp/）を使えば、ウェブサイトで公開されているさまざまな写真を一気に見られます。日本の太鼓の写真が欲しい場合、「太鼓」や「taiko」とキーワードを入力して検索します。すると、太鼓に関係のある画像の一覧が表示されるので、その中から適当な写真を選びます。画像のファイル名をアルファベットにしていることも多いので、漢字やかなだけでなく、ローマ字のキーワードで探すこともコツの一つです。

その他に、「イメージ検索オプション」の機能を使えば、さらに、詳しい設定で検索ができます。

◆写真を使うときの注意

写真は授業に効果をもたらしますが、使い方によっては効果を低めてしまいます。写真を授業で使う場合には、次のような点に注意しましょう。

- 写真を使う目的をはっきりさせる。その写真が、学習目的に最も効果的な教材なのかよく考える。
- 肖像権や著作権などに気をつける。

例えば「新聞を読みます」や「～に～があります」など、語彙や文型を練習するときには、絵やイラストの教材のほうが見せたいものがはっきりしてわかりやすいかもしれません。下の「新聞を読みます」のイラストと写真を比べてみてください。写真では、学習者が別のところに注目したり、誤解したりする可能性もあります。また、動きのあるものを説明したいときは、ビデオや動画のほうがわかりやすい場合もあるでしょう。どの教材にもそれぞれの長所短所があります。学習者の反応を予想しながら、授業の目的や時間配分などをよく考えて、使う教材を選びましょう。また、個人で撮った写真、インターネットから探した写真の場合、写っている人や写した人などの権利をそれぞれの国の法律に基づいて守るようにしましょう。特に、デジタルの写真は加工やコピーが簡単なので、注意が必要です。

＊

＊

注：＊印の写真、イラストは「みんなの教材サイト」から取りました。

参考資料

国際交流基金日本語国際センター（1995～1998）『写真パネルバンク』I.～V. 日本出版貿易

国際交流基金（2006）『すぐに使える「レアリア・生教材」アイデア帖』スリーエーネットワーク

清水康敬監修（2006）『必携！教師のための学校著作権マニュアル』教育出版

このコーナーの担当者：中村雅子、有馬淳一、木田真理（日本語国際センター専任講師）

読者のみなさんからのアイディア、成功例、失敗談などぜひお寄せください。

本ばこ －新刊教材・図書紹介－

「日本語の教材や図書に関する新しい情報がほしい」という海外の先生方の声をよく聞きます。このコーナーでは、最近出版された日本語教材や参考書を中心に紹介していきます。誌面の制約上、一回に多くの本を紹介できませんが、「海外の先生にとって使いやすい教材」「授業や研究の役に立つ本」、また、「知っていると便利な図書・資料」などを取り上げます。

※データ凡例　1著者　2出版社　3刊行年月　4ISBN　5判型・ページ数　6定価　7その他

ボランティア日本語教師と学習者のためのテキスト
『日本語　おしゃべりのたね』

●データ●

1西口光一監修、沢田幸子、武田みゆき、福家枝里、三輪香織 共著　2スリーエーネットワーク（〒101-0064　東京都千代田区猿楽町2-6-3　松栄ビル）TEL.03-3292-5751　FAX.03-3292-6195　URL. www.3anet.co.jp/　3 2006年7月　4 4-88319-394-2　5 B5判　130ページ、別冊29ページ　6 1680円　7 別冊付

地域の日本語教室で教えている日本語教師、そして学習者のみなさんにとって役に立つ一冊が出ました。

学習背景がさまざまで、学校のように規則的に学習することが困難な地域の教室では、文法や会話を体系的に教える教科書を一冊選ぶことは難しいでしょう。

この本は、積み上げ式に教えるのではなく、学習者に「おしゃべり」という形で、実際のコミュニケーションを体験させることを目標にしています。

▽このテキストの対象者

入門期の語彙・文型を学習した初級後半の学習者からですが、話を深めることによって、中上級者にも使用可能です。

▽テキストの構成

＜本文＞と＜別冊＞から成り、本文は20のユニットに分かれています。ユニットの中心はおしゃべりのたねで、ひとつのユニットに三つくらいあります。おしゃべりを進めていくための質問や、表・グラフや、クイズなどが含まれています。

その他に、活動ノート（おしゃべりのまとめとしての書き活動）・使える会話（会話例）もユニットに含まれます。

ユニット以外では役に立つ情報・ゲームや、巻末には文法・文型の解説もあります。

別冊は教師のためのページで、活動の目的や手引きが載っています。

この本はモジュール方式でできているので、ユニットの順番は状況に合わせて変えていくことができます。

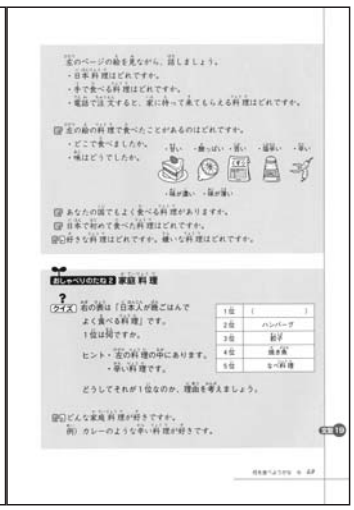
▽ユニットの紹介

20のユニットは次のようなテーマで成り立っています。

「はじめまして」「いただきまーす」「ちょっと買い物に」「ジェスチャーで伝えよう」「旅行大好き」「ペットと暮らす」「お元気ですか」「春は桜、秋はもみじ」「何を食べようかな」「日本の生活　高い？安い？」「みんなのスポーツ」「仕事、がんばります」「わたしの町は日本一」「ケータイ、持った？」「結婚いろいろ」「大変だったね」「祭りだ　わっしょい」「楽しく　日本語」「女と男― 仕事と役割」「ごみを減らそう」

地域ボランティアで日本語を教えていて教材選びに困っている方にはもちろん、交流活動のリソース、「おしゃべり」のネタを探している方にも役に立つと思います。

P.48



P.49

別冊 P.12－P.13

身近な「レアリア・生教材」を気楽に授業で利用する
『日本語教師必携　すぐに使える「レアリア・生教材」アイデア帖』

●データ●

1 国際交流基金　**2** スリーエーネットワーク（〒101-0064　東京都千代田区猿楽町2-6-3 松栄ビル）TEL.03-3292-5751　FAX.03-3292-6195　URL. www.3anet.co.jp/　**3** 2006年8月　**4** 4-88319-400-0　**5** A5判　229ページ　**6** 1890円

この教材は「レアリア・生教材」を利用した教室活動のアイデア集です。食品のパッケージ、チケットの半券、地下鉄の路線図、ファッション雑誌、インターネット上の素材など、さまざまな種類の「レアリア・生教材」を取り上げ、それぞれの素材に合った利用法を紹介しています。

ここで紹介されているアイデアの多くは、国際交流基金日本語国際センターで行われている研修の中で生まれ、使われてきたものです。これから日本語を教える予定の方、日本語を教え始めた方から、日本語教育の経験が豊富な方まで、さまざまな方を対象にしています。

「レアリア・生教材」は、「日本の文化、日本事情を伝えることができる」「教室活動に臨場感や現実との接点をもたせることができる」「日本や日本語への動機付けになる」などの点で有効です。この本では、「レアリア・生教材」を語彙練習や文型練習のためというよりも、上述の三つの有効性を生かすために利用するものと位置付けています。またさらに、それぞれの素材はさまざまな学習段階で利用することができるという考え方に基づいていますので、文型や学習レベル別ではなく、「レアリア・生教材」の種類がそのまま目次となっています。

例えば、6.「雑誌の広告のページ」という章では、「写真を見て内容を想像して話す」活動、「キャッチフレーズから広告の内容を読み取り発表する」活動など、素材の特性を生かした活動が紹介され、各ページでは、活動のステップがわかりやすく紹介されています。活動によっては、ワークシート例や会話例などが紹介されているものもあります。

巻末には、参考にできる「ウェブサイトの紹介」や「レアリア・生教材」と語彙や文型・表現などとの対照表「利用法一覧」がついています。

P.85

P.86

日本の30年来の変化がすぐわかる
『データでくらべる1970年代の日本と今の日本』

●データ●

1 PHP総合研究所監修　**2** PHP研究所（〒102-8331　東京都千代田区三番町3番地10）TEL.03-3239-6233　FAX. 03-3239-6263　URL. www.php.co.jp/　**3** 2006年7月　**4** 4-569-68613-3　**5** A4判変型上製　79ページ　**6** 2940円

1970年代の日本はどんな国だったでしょうか。30年前と比べると今の日本はどのように変わったでしょうか。日本語の関係者としては知っておきたいところでしょう。

本書では日本政府や官公庁、統計専門会社などから発表された約30年前の統計データと、最近のデータを比較しながら、その時代の日本の姿や社会の動き、日本国民の暮らしの変化などをわかりやすく紹介しています。

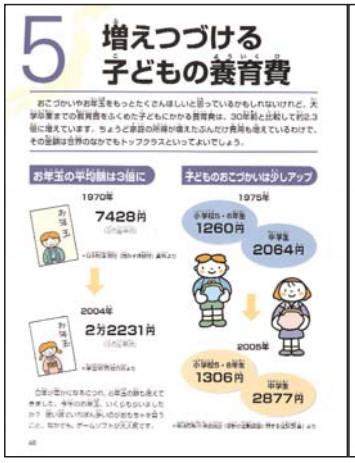
本書の構成は次のようになっています。第1章「日本のすがた」、第2章「社会のうごき」、第3章「人々のくらし」、第4章「教育と文化・スポーツ」、第5章「環境と自然」。

次に第3章で取り上げられたテーマを見てみましょう。第3章は1「増える1人暮らし」、2「家計の収入は2倍以上」、3「外食が多くなり、中食という言葉も登場」、4「米食中心から多様化へ」、5「増えつづける子どもの養育費」、6「便利な電化製品がそろった生活」となっています。これらのテーマを通じて、30年前の日本と現在の日本の生活様式、個人の収入、食生活、子どもの養育費などがどのように変わったかをわかりやすく説明しています。

また、本書は日本の小・中学生を対象に書かれているため、各テーマの内容が短く、それぞれ見開き2ページで簡潔にまとめられています。内容も理解しやすいように、データばかりではなく、図やイラストが多数使用されています。

授業で日本の30年来の変化などを紹介したいときに、教材としてもそのまま使えるでしょう。

本書には50音順さくいんもついています。



P.46

P.47

言葉遣いを豊かにするために楽しむ辞典
『知っておきたい　日本語コロケーション辞典』

●データ●

1 金田一秀穂監修　**2** 学研（〒146-8502 東京都大田区仲池上1-17-15）TEL.03-3726-8124　FAX.03-3726-8122　URL.www.gakken.co.jp/　**3** 2006年6月　**4** 4-05-302130-8　**5** A5判　400ページ　**6** 2310円

「頭が切れる」「味を占める」「足を引っ張る」「腹を立てる」など、日本語には、二つ以上の言葉が結びついてできたことば（＝コロケーション）がたくさんあります。一つ一つの言葉の意味はわかるけど、全体の意味がよくわからない、意味は何となくわかるけど、使い方がよくわからない、この表現とこの表現、よく似ているけど、どう違うんだろう。みなさんは、そんな悩みを持ったことはないでしょうか。

本書は、使用頻度が比較的高く、手紙やブログ、メールなどを書くときにも役立つ「知っておきたい」コロケーションを、慣用表現も含めて約4000、集めた辞典です。

コロケーションの先頭に来ることば（＝キーワード）が五十音順に並べられていて、とても引きやすくまとめられています。「意味と使い方」の欄には、「用例」や「参考知識」「類義語」「対義語」などが示されています。誤って使われやすいコロケーションについては、「誤用例」が示されており、役に立ちます。巻末にはコロケーションの後半部分を見出し語とした逆引き索引もついていて、使いやすくなっています。また、コラムの欄には、株式用語やパソコン用語、スポーツ用語が分野別コロケーションとしてまとめられています。

監修者は「まえがき」で「コロケーションは、私たちが暮らしている文化を表しているのである。文化の中の感じ方、考え方が、こうしたコロケーションの中に表現されている」と述べています。みなさんの国の言葉の使い方と比べながら、本書を楽しみながら読んでみてください。ことばと文化の関係について、きっと新しい発見があるでしょう。

P.5

P.6

具体的な場面を想定して一歩一歩練習する
『初級が終わったら始めよう　にほんご敬語トレーニング』

●データ●

1 金子広幸 **2** アスク（〒162-8558　東京都新宿区下宮比町2-6）TEL.03-3267-6864　FAX.03-3267-6867　URL. www.ask-digital.co.jp/　**3** 2006年5月　**4** 4-87217-612-X　**5** B5判　176ページ　**6** 1890円　**7** CD1枚付

敬語をひと通り勉強したのに使えない、敬語が難しいと思う人たちは多いと思います。本書はこのような人のための教材です。全体は3章に分かれ、1章「敬語への入り口」では、場面に応じてさまざまな文のスタイルがあることを簡単に学びます。2章「テーマ別敬語トレーニング」ではテーマ/場面に応じた敬語表現を練習し、3章「だんだん敬語をとる」では、場面に応じたスタイルの選び方を学びます。本書の特徴は、2章にみるように、具体的な場面を想定して、基本的な形の練習から実際に近いロールプレイまで、順を追って敬語の練習ができることです。

本書の中心である2章は18課に分かれ、取り上げられているテーマには、「誘う」「お願いする」「おわびをする」のような一般的な言語機能に結びつくもの、「訪問する」「予約を受ける」「面接試験を受ける」のような具体的な場面に密着したものなど、社会生活上必要なさまざまなテーマがあります。

2章の課の構成を5課「お願いする」を例にとってみてみましょう。まず、「できますか」で、外国人が日本人に何かを頼もうとする具体的な場面で誤った表現を含む会話を提示します。次に、「敬語で言ってみましょう」で、先の会話の場面に適切な表現を解説し、例文を示します。続く「練習しましょう」では、CDを聞きながら文型や表現のドリルをします。「これでOK!」では、「できますか」の会話中の誤った表現を適切に直した会話をCDで聞きます。「チェックしましょう」で、この課で覚えた表現の確認をし、「どんどん覚えましょう」でさらにドリルをします。最後に「やってみましょう」でロールプレイをしてみます。

このように、さまざまな練習を通して、敬語の使い方を身につけられるように作られています。また、各課に英語、韓国語、中国語訳付の単語リストがあります。

P.50

P.51

P.11～13は国際交流基金の以下の日本語専任講師が図書を選び、分担して紹介文を執筆しました。
生田守、久保田美子、王崇梁、木谷直之、向井園子（執筆順）

文法を楽しく!!

「～て～」(2)

通信で習った項目：「は」と「が」、他動詞・自動詞、受身、やりもらい、～てきた、～ていく、～ている、～てある、～ために、～ように、～たら、～と、～て、～なくて／ないで

前回は「～て」の使い方について勉強しました。今回も「～て」についてもう少し考えます。

次の文はどこかおかしく感じられます。正しい文に直してください。

問題 1

1. その角を曲がって、100メートル先に銀行があります。
2. 先週、車で学校へ行って、先生がすごく怒りました。

そうですね。答は次のようになります。

1.' その角を曲がると、100メートル先に銀行があります。
2.' 先週、車で学校へ行ったら（行くと）、先生がすごく怒りました。

「Sentence1 て、Sentence2」は、S1のあとに、S2（主節）が引き続いて起こること（継起）を表します。「角を曲がる、そうしたら、銀行がある」というのは、動作が引き続いて起こっているように見えるので、「～て」でも良さそうですね。ところが、「銀行がある」は動作ではありません。また、「S1て、S2」が「継起」を表す場合、S1とS2の主語は同じでなければならないというルールがあります。

S1とS2の主語が同じで、両方の動詞が動作を表す次の文では、「～て」は自然になります。

1." 彼はその角を曲がって、100メートル先に銀行を見つけました。
2." ぼくは先週、車で学校へ行って、先生にすごく怒られました。

1"では、「角を曲がった」のも「銀行を見つけた」のも「彼」です。また、2"では、「学校へ行った」のも「怒られた」のも「ぼく」になります。

もう一度1と2に戻りますが、今まで述べた以外に、1と2が「～て」では不適切な理由がもう一つあります。それはS1とS2の意味的な関係です。1では「その角を曲がる」という条件・きっかけがあって、「100メートル先に銀行がある」、2では、「車で学校へ行く」という条件・きっかけがあって「先生が怒った」という結果が生じています。このように、条件・きっかけと結果の関係を表すためには、「～て」ではなく、「～と」や「～たら」を用いる必要があります。

今までは「～て」の肯定形について意味用法を考えましたが、次に、「～て」の否定形について考えましょう。

● 「～て」の否定形

「～て」の否定の形は、動詞の場合と形容詞・「名詞＋だ」の場合で異なります。

1．動詞の場合

動詞の「～て」の否定形には「～ないで」と「～なくて」の二つの形があります。

1）「～ないで」

動詞「～ないで」は次のように、「付帯状況」や「交替・代替」を表すときに使われます。（2）の「交替・代替」については、動詞「～なくて」も用いることができます。

(1) a. 朝ごはんを食べないで会社に行った。（付帯状況）
　　b. ？朝ごはんを食べなくて会社に行った。
(2) a. 会議には森部長は来ないで、林副社長が来た。
　　b. 会議には森部長は来なくて、林副社長が来た。
　　（交替・代替）

前回述べたように、付帯状況は「その動作がどのような状態で行われているか」を表します。「代替・交替」というのは、「その代わりに」という意味を表します。

2）「～なくて」

動詞「～なくて」は上に述べた「交替・代替」の意味も表しますが、次のように、理由を表すときにしばしば用いられます。

(3) 日本語がわからなくて、困りました。

(4) A：きのう授業に遅れちゃったんだ。
B：どうしたの。
A：いつも通り、家を出たんだけど、バスが来なくて……。
B：タクシーに乗ればいいのに。
A：タクシーも来なくて、本当にいらいらしたよ。
B：それで、遅れたのね。

(3)では、日本語がわからないために困り、(4)ではバスが来なかったために、Aさんは授業に遅れたり、いらいらしたりしました。(3) では「日本語がわからなくて」、(4) では、「(バスが) 来なくて」が理由を表しています。

では問題2です。次の文はどこがおかしいか考えてみてください。

問題2
1. 書類の書き方がわからなくて、係の人に聞きましょう。
2. お金がなくて、1000円貸してください。

みなさん、わかりましたか。

問題2の1と2に共通しているのはS2（主節）に「聞きましょう」「貸してください」と意志表現が来ていることです。意志表現というのは「(学校へ) 行きたい・行こう・行ってください・行け」のように話し手の意志を表す表現のことを言います。では、S2を意志を表さない表現、無意志表現に変えてみましょう。

1.' 書類の書き方がわからなくて、全部は書くことができませんでした。
2.' お金がなくて、困りました。

S2（主節）を無意志表現にすると、文が適切になりましたね。「～ことができる／できない」「困った」は話し手の意志を表しません。

「動詞＋なくて」が理由を表すためには、S2（主節）が無意志表現であることが必要になります。

理由を「動詞＋ないで」で表すこともあります。S2（主節）に「困る・がっかりする・大変だ」などの感情や評価を表す動詞が来る場合が多いようです。しかし、くだけた話しことばに限られ、また、使えないことも多いので注意が必要です。

2. 形容詞・「名詞＋だ」の場合

形容詞・「名詞＋だ」の否定形は「～なくて」だけです。次のように並列（語や事柄を並べること）を表す場合と、理由を表す場合があります。

(5) このかばんは大きくなくて、ちょうどいいサイズだ。（並列）
(6) 故障の原因が簡単じゃなくて、困っている。（理由）

(5) は並列を、(6) は理由を表していると言えます。しかし、並列か理由か区別のつかない場合も多いです。次の文を見てください。

(7) このりんごは丸くなくて、まずそうだ。

(7) では、「丸くないから、まずそう」（理由）なのか、「丸くない、そのうえに、まずそう」（並列）なのか、判断がつきにくいです。

「～なくて」は「～て」と同じく、それ自体には理由の意味はなく、S2に来る語や意味的な関係で、並列になったり、理由になったりします。動詞の場合と同じく、S2（主節）に無意志表現（「可能動詞」や、「困る・心配する・安心する・驚く・びっくりする・いらいらする」などの話し手の気持ちを表す表現）が来ると、理由になりやすくなります。

参考文献

北川千里 (1976)「「なくて」と「ないで」」『日本語教育』29号
市川保子 (2005)『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク

このコーナーの担当者：市川保子（日本語国際センター客員講師）
このコーナーについてご感想や質問があれば送ってください。「ヤスコの日本語ハウス」という個人のホームページを開いています。英語の翻訳も付いていますので、ぜひ活用してください。ホームページのアドレスは、http://homepage3.nifty.com/i-yasu/index.htmです。

KC研修生の（関西国際センター）Nipponリポート

第7回 日本の高校に行きました

このコーナーでは、関西国際センターの日本語研修に参加している研修生が研修を通して発見したNipponについてリポートします。

◀高校生研修の参加者

「日本語学習者訪日研修（高校生）」に参加した18か国40名の研修生は、日本の高校や高校生について知りたいと思い、大阪府立泉北高等学校を訪問しました。

【10：00】高校に着きました。

学校に入るとき、スリッパをはきました。

高校生は制服を着ていました。

イギリスでは、学校に入るときもくつでいいです。

私の国の高校には制服がありません。

【11：00】学校の中を見学しました。

【12：00】昼ごはんの時間です。

【お弁当】

【食堂】

みんなまじめに勉強しています。あれ……寝ている人もいますね。

昼ごはんはお弁当を持ってきます。だいたいお母さんが作るそうです。一番おいしい料理ですね。お弁当がない人のために食堂や売店もあります。

【売店】

日本の高校と私たちの国の高校では、ちがうところがいろいろありました。制服やスリッパのことはとてもおどろきました。それから、たくさんの高校生が携帯電話を持っていることにもおどろきました。

▽日本の高校生活についてもっと知りたい人は下のURLを見てください。

- であい（日本語/英語）http://www.tjf.or.jp/deai/
- 大阪府立泉北高等学校（日本語）http://www.osaka-c.ed.jp/semboku/

このコーナーの担当者：和泉元千春、廣利正代〔関西国際センター日本語教育専門員〕、リポーター：日本語学習者訪日研修（高校生）研修参加者